



著／秋山真琴  
絵／うすたけ

風が泣いている。

幼いうちに親に捨てられた獣が、月夜の晩に、か細い声で長く泣くように。壁の向こうで吹き続けている風は、嵌め殺しの窓を震わせ、木製のドアを軋ませた。

風の音にまぎれるように。

少女が音も立てずに泣いていた。

或いは、涙を流してはいないかもしれない。

それでも、閉め切られた部屋にひとり。ベッドに倒れ伏したままの姿勢で。もう何時間も、泣き続けていた。

豪華な調度品が並ぶ、思わず歓声をあげたくなるような部屋だ。少女が身を任せているベッドは、大人がふたりばかり横になってなお、余裕のあるもので、クッションもよく効いている。

収納スペースが少ないことから、部屋が客人向けのものであることが分かる。

もてなしの心を具現化したような部屋だ。しかし、それが少女に響いている気配はない。無理もない。少女は、ここに閉じ込められているのだ。

夕暮れ時、収穫を終え、飼い犬と共に家路を急いでいた少女は、その道すがら、馬車を駆り、どこからともなくやってきた“伯爵”に誘拐されたのだ。

場違いに豪華な馬車が背後からやってきたので、道を空けたことは覚えている。飼い犬が甲高く吠えだてる中、馬車の窓が少しだけ開かれ、そこから覗いた紫黒色の片目を視界に入れた瞬間、少女の意識は刈り取られた。

目が覚めたとき、少女は、既に、この外側から鍵の掛けられた部屋に放り込まれていた。このところ噂になっている“伯爵”に誘拐されたのだと、二度と平穏な日常に戻ることは出来ないのだと悟るのに、そう長い時間は必要としなかった。

／

飽くことなく泣き続けているうちに、少女の耳は、ひとつの異音を捉えた。

天井から聞こえてくる、その奇妙な物音は、風が鳴らしているにしては不規則で、屋根裏のネズミの足音にしては重々しかった。

不審に思った少女が顔をあげるのと、天井の一角が横にスライドしたのは、ほぼ同時であった。

「ひっ」

少女は音を立てて息を吸い込むと、急いで身を起こし、逃げるようにベッドの隅に移動した。その視線は、天井の一角に吸い寄せられ、釘付けになっている。

口元に手をあて、声を押し殺している少女が見ている中、天井に人がひとり通り抜けられる程度の穴が生まれたかと思うと、ぬっと埃で汚れた顔が突き出された。

年の頃は少女とそれほど変わらないであろう。天然パーマの金髪はクルクルと渦を描いており

、冬の空色の瞳には強い意志の炎が燃えている。それは、端正な少年の顔だった。

「見つけた」

少年の口から、声変わり前の、あどけない声が放たれる。

顔が隠れる。

少女が脅えていると、今度は奇術のショーのように天井から足が突き出され、その一秒後には、もう、少年は部屋の分厚いカーペットに着地していた。

物々交換で得た布を、接ぎ合わせた庶民の服をまとっている少女と異なり、少年は小ざっぱりとした衣服に身を包んでいた。辺境貴族の子息か、大商人の跡取りか、いずれにせよ少女とは異なるせかいの住人と思われた。

身分の違いを感じさせる格好から、もしかしたら、この少年は“伯爵”の血筋を引いているか、或いは“伯爵”自身であるかもしれないと少女は気づき、改めてベッドの隅で震え始めた。

しかし、そんな少女に構うことなく、少年は、むしろ照れを隠すような仕草で、高価な服についた汚れを手で払いながら、髪の毛をくしゃくしゃと掻いた。

「えっと」

少年が言う。

「そんなに脅えないでほしい。僕は怪しいものじゃない。君を助けに来たんだ。“伯爵”の馬車が、猛スピードで走っているのを見て、道端に籠が放り出され、首輪のついた犬が吠えているのを見て。それで、気になって、やってきたんだ」

思いついた言葉を、吟味することなく、細切れに出すような喋り方であった。

時おり、ちらちらと少女の方に目を向けながら、しかし照れくさいのか、すぐに視線を外し、室内の調度品を眺めながら話し続ける様は、どこか初々しさを感じられた。

「そうだ、自己紹介が遅れたね。僕はルシオ。見ての通り都の住人だけれど、“伯爵”のような悪人ではない。ほんとうだよ」

都の住人という言葉が出たとき、少女の瞳に驚きが走った。

辺境貴族や大商人でさえ、少女から見れば雲上の存在であるのに、どうやら少年ルシオは、そのさらに上に位置する存在だった。

「良かったら、なんだけど。君の名前を教えてもらえるかな」

「ステラ……」

少女、ステラは泣き疲れ、掠れ気味の声で答えた。名前だけを言ってから、すぐに都の住人に対して失礼ではなかっただろうかと思い、慌てて続けた。

「小麦谷のステラと申します。家の名前はありません」

「教えてくれてありがとう、よろしく」

会話が成立したことが嬉しいのか、ルシオはにっこりと微笑んだ。

夏の太陽のような笑顔に、思わずステラは言葉を失った。都の住人であれば、当然、姓を持っているはずだが、少年はルシオとしか名乗らなかった。そのことに疑問を覚えていたが、ルシオの輝く笑顔に、違和感は音をたてて吹き飛んだ。

「さて、早速なんだけれど」

ベッドから距離を保ったまま、ルシオが話し始めた。

「僕は“伯爵”の噂の真偽を確認しに来ただけだけど、ステラ、君が閉じ込められているのを見て、噂が真実であることを確信したよ。僕は、このことを報告するために都に戻らなければならないのだけど、君はどうする？ きっと、ここに残ってれば、遠からず“伯爵”に血を吸い尽くされ、死んでしまうだろう。もし処女だったら……」

ハッと息をたてて、ルシオは黙った。

意味が分からずステラが首を傾げていると、すっかり赤面したルシオは、部屋を一望し、鏡台の中に顔を赤くして突っ立っている金髪の少年を見つけ、いよいよ顔を赤くした。

「いや、その、なんでもない。デリカシーがない発言をしてしまったことを詫びよう」

「デリカシー？ 何のことですか??」

「なんでもないんだ。話を戻そう。命を落としてしまうか、“伯爵”の血族に加わってしまうか、いずれにせよ君は、人でなくなってしまう。それが嫌だったら、そこの」

と言いながら、ルシオは鏡台の前に置かれた、小さなナイフを指差した。

「ナイフを首に突き立てるか、それとも僕と一緒に逃げるかだ。君はどうしたい？」

「私は……」

ステラは首を振った。

とにかく帰りたいという思いが、頭の中を埋め尽くしていた。死んでしまうことも、人でなくなってしまうことも想像がつかなかったが、もう二度と、両親と飼い犬のいる、平穏な暮らしに戻れないのだと思うと、どうしようもなく悲しかった。

だからステラは拳を握り締め、その思いを伝えようとした。

その時。

人に懐いていた獣が、突如として牙を剥くかのように、ルシオはステラに飛び掛った。

／

開錠の音が響き、ドアが開いた。

現われたのは異形の怪物であった。

黒の上下に、純白の手袋。首元には、しっかりとタイが締められている。完璧なまでに人間の執事であった。しかし、ただ一点、唯一、頭部だけが違っていた。肉付きのいい肩の上に乗っかっていたのは、左右に角を生やした山羊の頭だったのだ。

「де ты пропадаешь？」

山羊執事の口から、聞きなれない言葉が放たれる。その言葉は、まったくの意味不明であったが、困惑の色に塗り潰されていることは分かった。何故なら――、

何故なら室内には誰もいなかったのだ。

深い眠りに落ちていた少女を、この部屋に放り込んだのは、誰だろう、この山羊執事であった。部屋の鍵はしっかりと閉めたし、その鍵だって、つい先ほどまで、確かに掛かっていた。

ズカズカと室内に踏み込んできた山羊執事は、ベッドの上を見て、部屋をぐるりと見回し、そ

れからようやく天井の穴に気づいた。

「Сбежал！」

甲高い声をあげると、山羊執事は、バタバタと部屋を出て、廊下を走っていった。

開け放されたドアから、しばらくの間、山羊執事の足音が聞こえていたが、やがて、それは遠ざかり、聞こえなくなった。

室内に静寂が戻り、さらに十秒が経過し、

「はあ……！」

無人だったベッドの上に、ルシオとステラの姿があった。

片手でステラの口元を押さえ、もう片方の手でステラの手を、しっかりと握っていたルシオは、全力疾走を終えた直後のように、ぜいぜいと息をしていた。

自分の口を押さえていたルシオの手が離れると、ステラはすぐに言った。

「あの。今のは、一体……？」

ステラもルシオも、ずっとベッドの上にあったのだ。それにも関わらず、山羊執事はふたりを見向きもしなかった。

息を荒げながら、ルシオは早口で言った。

「これが潜入役を仰せつかった理由だよ。息を止めている間、僕は自分の姿を消すことができる」

ひらりとベッドから飛び降り、ルシオは、二回ほど、大きく深呼吸した。

そうして、ようやく呼吸が落ち着いたのか、ルシオは頭を掻きながら、もう片方の手をステラへ向かって差し出した。

「行こう。僕らは選んでしまった。だから、一緒に、逃げよう」

「はい！」

先ほど口の中に仕舞いこんでしまった想いを伝えるように、ステラはルシオの手を力強く握り返した。

／

邸内の構造は、複雑を極めた。

まるで雛鳥を逃がさないように、薄暗い廊下は意味なく交錯し、至るところに行き止まりがあり、おおよそ暮らすのには不向きであるように思われた。

山羊執事が警告を発したからだろうか。

時おり、ルシオたちは“伯爵”の従僕とすれ違った。執事服あるいはメイド服に身を包んだ彼らは、山羊執事と同じように、人間の衣類を完璧に着こなしていたが、その肩の上には必ず動物の頭があった。羊だけではない、猫や犬、馬や牛、ネズミもいた。

彼らとすれ違う度に、ルシオはステラを抱き寄せると、壁際に寄り添い、そっと息を止めた。姿だけではなく、音や匂いまでも消失させることが出来るのか、発達した嗅覚を持つ犬執事も、超音波を聴き取る蝙蝠メイドも、ルシオたちに気がつくことはなかった。

「だいぶ出口に近づいてきた」

ステラの手を引っ張りながら、先導していたルシオが小声で、囁くように言った。

ふたりは両側に書棚が並ぶ廊下を走っていた。棚には、ぎっしりと本が詰まっていたが、どの本の背表紙もタイトルが書かれてなく、それが何の本であるかは不明だった。

黒ずんだ本や、黄ばんだ本。見えるのは背の部分だけだが、どの本も薄汚れており、とても手に取って読みたい気分にはならない。

「急ごう」

その奇妙な様子に、ふと足を止めてしまっていたステラに呼びかけるように、ルシオが声を掛けた。

それまでの廊下と異なり、本棚と本棚の間に、時おりランプがあるだけで、その終わりは闇に閉ざされていた。先行きが見えないことにステラは不安を覚えたが、来るときにこの道を通ったのか、迷いなく走り続けているルシオの背中から勇気を貰った。

どれくらい走っただろうか。突然、バネが跳ねるような音が聞こえたかと思うと、ギシギシと歯車が回転する音が降ってきた。

ルシオは走りながら、周囲を見回したが、廊下は薄暗く、不気味な光沢を湛えている革表紙の本が見えるだけだ。

歯車の回る音に、ルシオが警戒心を抱いていることはステラも分かった。鳴り続ける軋む音に、心臓がきりきりと締め付けられていくような気分になったが、ルシオの手を強く握り返すことで耐えた。

一分ほど走り続けたらどうか。

「あっ！」

突然、大声をあげるとルシオは足を止めた。

「天井が降りて来ている！！」

「え！？」

頭上を指差したルシオの人差し指の先、依然として薄暗くて、よくは見えないが、確かに、そこには薄汚れた天井が見えていた。しかも、それは刻一刻と明瞭になってきていた。

ステラは素早く振り向いた。

歯車の回転する音が響く中、自分たちが走ってきた道は、暗闇に閉ざされている。既に、この廊下は三分以上は走っている。今から戻ろうとしても、天井が落ちきってしまう前に戻れるとは思えない。

ルシオの横顔を覗き込むと、その目は大きく見開かれ、動揺しているように落ち着きなく揺れ動いていた。このまま全力で走り続けても間に合わないのだと分かった。

呼吸を止めて姿を隠しても意味がない。

やがて床と接吻を交わすことになるであろう天井は、姿が見えていようがいまいが、何もかもを等しく押し潰すだろう。

ルシオの手をやさしく振りほどくと、ステラは背を伸ばして、手が届くギリギリのところにあった革表紙の本を抜いて放り捨てた。

床に落ちた本の表紙には、複雑な紋様が踊っており、その中央には、赤黒いインクで女性の名前が綴られていた。その不気味さに、ステラは一瞬だけ動きを止めたが、すぐに隣の本を抜いて、また放り捨てた。

「ステラ、何をしているの？」

問いかけるルシオを見向きもせず、ステラは淡々と本を棚から抜きながら答えた。

「急いで。本を抜き取って、このスペースに身を入れるの！」

「……なるほど！」

ルシオはステラの隣に立つと、勢いよく本を抜き始めた。爪先立ちをしているステラが、ふらふらしながら本を抜いている間、ルシオはいっぺんに三冊も四冊も抜き取ることができた。

天井に巣を張っていた蜘蛛が目視できるほどになった頃、床には大量の本が散らばっていた。本はすべて革表紙だったが、一冊として同じ色合いのものはなかった。赤の滲んだ白い表紙のものから、黒一色のものまで。共通点は、表紙に女性名が赤黒いインクで書き記されていることだけだ。

「さあ、もう充分だろう！ 僕の上に乗って、早く入るんだ！」

床に手を突いたルシオが、背中をステラへと向ける。

「ごめんなさい！」

大きくなってきた歯車の音がガランガランと音を立てる中、ステラはルシオの背中を踏むと、本棚の間に身を滑り込ませた。

ステラがしっかりと本棚の間に入り込んだことを確認すると、ルシオは足元の本を踏み台に、その隣へと飛び込んだ。狭い空間にぴったりと入り込み、お互いに手を握り合う。

半秒後。

ふたりの目の前を、灰色の壁が通過した。

側面から見た天井だった。

もはや歯車の音は、耳をつんざくほどで、舞い上がる埃と、本のおいにおいに包まれ、ふたりは手を繋いだまま、目を瞑り、息を潜めた。

どれほど時間が過ぎ去っただろうか。或いは、数秒の出来事だろうか。凄まじい震動と共に轟音が響き渡り、歯車の音が止んだ。

ステラが目を開けると、いつの間にか灰色の壁はなくなっていて、さっきまで見えていた天井の反対側だろう、灰色の床が広がっていた。

床に放り捨てた本は、すべて押し潰されてしまったのだろうか。

そんなことを思いながら、ステラは転がり落ちるように、本棚から抜け出し、地面に足をつけた。その後を追って、ルシオも降り立つ。埃が舞い踊る。

「なんとか助かったみたいね」

「ありがとう。ステラの機転が利かなかったら、ふたりとも今ごろ死んでいたよ」

「ルシオがいなかったら、きっと私は、もっと早くに死んでいたわ」

ふたりともだいぶ汚れていたが、笑顔を向け合い、闇の中で白い歯を見せた。

「あらあら。仲の良いこと、羨ましいわ」

声がした。

若い女性の、高い声だ。

振り向くと深紅のドレスを着た女がひとり、立っていた。

／

「まさか子猫ちゃんを逃がさないために、私が出向くことになるとは、思ってもみなかったわ」  
ぴしゃりと扇子を広げ、優雅に煽ぎながら女は、艶然と微笑んでみせた。

周囲は依然として埃が舞い踊り、深く息を吸い込むと咳き込んでしまうほどだったが、どうしてか女の周囲だけは、新鮮な、きれいな空気があるように見えた。

「誰だ……！」

ステラを守るように、半歩、前に出ながらルシオが言い放った。

しかし、女は、慌てることなく扇子を遊ばせながら、のんびりと受け答えた。

「あら失礼なナイト様ね。レディに名前を訊ねるならば、まずは自分が名乗るべきではなくって？」

「……ルシオだ」

ぎりりと歯を鳴らせながらルシオは言った。

「かわいい名前ね。でも、下の名前だけでは駄目よ、名乗るときはフルネームでなければ、レディに恥をかかせてしまうから」

女の挑発するような物言いに、ルシオは激しい勢いで口を開いたが、言葉にしてしまう前に思い止まったのか、静かに口を閉じた。

「ふふふ、冷静なのね。いいわ、ルシオ、あなたが半分しか名乗らないと言うのであれば、私もちゃんと名乗る必要はないわよね？ そうね、私の名前はパンディウス。勿論、偽名だけれど」

ドレスを着た女、パンディウスは何が面白いのか、口元に張り裂けてしまわんばかりに毒気のある笑みを浮かべ、しばし見せ付けるようにしてから扇子で隠した。

「パンディウス」

苦虫を噛み潰したような顔でルシオは言う。

「何が目的だ？」

「あら」

ルシオの問いが、さも意外で仕方がないと言うように、パンディウスは目を見開いた。

そして言った。

「分からないの？ あなたも、その後ろで隠れているあなたも、今から死ぬのよ？」

／

直後。

パンディウスの左目に異変が生じた。

黒目から小さな矢印が生じたかと思うと、矢印は漆黒の軌跡を残しながら、とぐろを巻く蛇のように、ゆるゆると白目の部分に、弧を描いていったのだ。

蛇行する矢印は、ひとしきり左目を旋回すると、眼球の裏側へと潜りこんで消えた。

と思った次の瞬間、矢印は右目に現われた。

やはり、とぐろを巻くように、グルグルと白目の部分に弧を描いていく。

「それは！ まさか！！」

ルシオが悲鳴に近い叫び声をあげる。

「気がついたのね、でも遅すぎたわね。私の秘法が完成した瞬間、私の視界に入っている生き物は、皆、等しく石と化すわ。ルシオ、あなたが息を止め、姿を隠そうがどうしても、それは逃げることのできない、運命よ」

ゆるゆると蛇行した矢印は、最後に、巣に帰るように右の黒目に入り込み、その瞬間、パンディウスの両目から、不可視の、白光が迸った。

／

光が駆け抜けた直後、ルシオは握っていた手を放すと、懐からナイフを取り出し、一直線にパンディウスへと走り寄った。

勝利を確信していたパンディウスは、石化していないルシオを見て、慌てて半身を引いたが、すぐに冷静を取り戻し、再び秘法を発動させた。

左目から生じた矢印は、もはや無駄に蛇行することはせず、一直線に眼球の裏側を抜け、右目へと向かった。

二度目の白光が放たれる直前、ルシオはナイフを放り投げると、懐から二つの輝く欠片を取り出した。

／

ステラが閉じ込められていた客間。

今は、もう無人になっているその部屋の一角、鏡台が叩き割られている。

／

攻防が交錯した後、ステラが見たのは、両手に隠し持っていた鏡の欠片を掲げたルシオの後

姿と、くすんだ灰色の石像と化したパンディウスの姿であった。

一拍の間を置き、パンディウスの石像は床に倒れ、波打つ豊かな髪の一部が、欠け落ちて飛んでいった。

そして。

倒れたパンディウスに覆い被さるように、ルシオもまた脱力したように倒れた。

「ルシオ！」

慌てて駆け寄ったステラは、ルシオの背中に手を回し、助け起こした。

ルシオの顔は真っ白になっていた。

血の気が引いているのか、唇は青ざめており、その口から漏れる吐息も弱々しかった。

「どうしたの、ルシオ？ 何があったの？」

「ああ、ステラ——」

ルシオの返事は、小声で、呟くようだった。

その瞳は力なく揺れ、焦点を合わせることも出来ないようだった。

「僕の……ほんとうの力は隠れることじゃないんだよ……。息を止めて、身を潜めると言うのは……ほんのちょっとした、おまけに過ぎないんだ……」

「おまけ……？」

「ステラ……。僕のほんとうの力、それは時間を止めることなんだ……」

「時間を……止める？ ルシオ、何を言っているの？ 時間を止めるなんて、どういうことなの??」

「かんたんなことさ、ステラ……。ちょっと心臓の動きを止めれば、僕の周囲に流れる時間は……、止まってしまうんだ。だから、石化の光がやってきても、その間、心臓を止めていれば……光は僕らに届くことなく、過ぎ去ってしまう……」

「心臓を止めるですって！ ルシオ、そんなバカなことを……！」

「……ステラ。君、意外に喋るんだね……」

それだけ言うと、ルシオは目を瞑り、静かになった。

ステラはルシオの手を握ると、そっとその胸に抱かれるように身を寄せた。ルシオの四肢は脱力し、寄り添ってきたステラを抱き締めることも、手を握り返すこともなかった。

ステラは目を瞑り、ルシオに寄り添い、その鼓動を感じる。

その鼓動を。

「あら？」

ルシオの心臓は、力強く脈動していた。

／

「ルシオ。あなた、きつとろくな死に方をしないわよ」

手を繋ぎ、走りながらステラは言った。

その隣でルシオは、勢いよく地面を蹴りながら走っていた。既に、その顔には生気が戻り、年

齡相応の生命力が輝いていた。

「呼吸を止めるのと一緒に。心臓を止めるのだって一瞬のことさ。副作用で、ちょっと死んだように気絶するけれど、すぐに回復する」

「私、本気で心配したのに」

「ごめんね。悪気はないんだ。でも、あのときは説明する元気もなくて」

「……バカ」

ふたりは既に“伯爵”の屋敷を抜け出し、月夜の森を走っていた。

パンディウスが最後の敵であったのか、あの後、ふたりの行く手を阻む敵も罠もなく、難なく脱出することができた。

“伯爵”の屋敷は森の奥まったところにあり、時おり狼の群れに遭遇することがあったが、息を潜めるルシオの傍にいれば、気づかれることはなかった。

追っ手が来ていないか、時おり背後を振り返りながら、ステラは考えていた。

あの部屋で泣き明けていたとき、もう二度と故郷に帰れないことが悲しかったと。でも、今は違った。

この森を抜ければ、ステラは両親の待つ家に帰り、ルシオと別れることになるだろう。

その別れの方が、今は悲しかった。

「この手を離したくない」

「え？ ステラ、今、何か言った？」

「いいえ、聞き間違いじゃない？」

「そっか」

月明かりの下、ステラの故郷である小麦谷は、まだ遠い。ふたりは、まだ暫らくの間、手を繋ぎ、走り続ける。けれど、ずっとではない。遠からずステラは故郷に帰り、ルシオと別れることになる。

「ルシオ……」

ぎゅっとステラは、手を握り締めた。

ルシオは前を向いたままだったが。

ステラの想いに応えるように、手を強く、握り返した。

片目を閉じたミネルヴァの梟が夜空を飛ぶように、月はまだ中天に輝いている。

その隣を、つ——と、流れ星が横切った。

森の向こう。

小麦谷のさらに先にある、夜の都へとふたりを導くように、流れ星は飛んでいった。

## シューティングスター

<http://p.booklog.jp/book/40025>

著者：秋山真琴

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/unjyoukairou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40025>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40025>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.